妙竹林話

七偏人

四編

上中下

へ13
3121
4

特
へ13
3121
4

徒然なるまゝに日ぐらし硯にむかひ
て、七偏人の四編の序文、八ツ何がし
と物ごゝろつきて、忠孝仁義の
せど、下手の考休
得ざるを、井蛙の嗤ひ林
てまゝ井蛙取ら、笑ひ
つゝの詠次第も、井
の放屁なる

東都

梅亭金鵞編次

○

再説下太郎政助い處ゟ松葉屋右大兵ゟと自ゟ
呼方ゟ付て出次第湯の女ゟ惚向
湯の入世と仕舞て我家へ帰ゟ
ゟ打驚ゟて考ゟのとし更て漸ゟ庇廂の月
影障ゟね新下ゟて顔ゟ色ゟ安ゟとゟ後構へゟとゟ事ゟ

おなじ神飛八雄さんと両個の老の家ー小遠ゝ
妻を送らんとて我屋敷の老父とも連て此処まで来りう
しが我屋敷早くも新下れて有家つ妻をうんのご
怪と思惟て立止まると飛八力疵ゝり「コウ人殺ゞ白昼の後
方へこの有て来るぞへ」と思惟ーこれ不惟ゝ
こうしてゐ居ーやア思惟けるご疵未痛家つや宮年
妻こいうんをハ「おのれ逃いよう手ゝこのさと先へ歩
行ゝ」「コレサ」飛八後方ゟ有て来ゝうー人殺ゞ後方ゟ

そうゝ知つて居この小力の老父分捕をうんぞうんごと
「仕方ゝ乗の小力の新金ゟ奪ゝ」「此方ハ
の新金ゟ奪ゝ」飛八力疵ゝり「此方ハ
逃この小力ぞうごゝ」「ムヽ」と時向ゝ奴等ゞ
逃この小力ぞうごゝ」「ムヽ」と時向ゝ奴等ゞ
父ハ後方ゟ来ゝけゝ「仇を立止まつて評義のこと居ぞア

夜が明るに従つて五人連ハ喜へサア飛車が銘々の勢ひで先へ
さらさらと進む桂ナ飛車へコレ孔子のとほりで箱根から此方へ野
暮と化物があつておとまりが悪いのウツ 桂へ野暮と化物
ハ箱根から先キだけれど追剥や盗賊ハ数箇目から先きで分味が悪
いのさ 飛車へデイ不景気な事を云ふ味方の勢ひのくじける
様な事を云ふやアがらア 香へサアサア飛車の後から付てみんなが
歩行ます 角へ猿の様に恐怖ます 金へ吾儕アがうし張つてるワ
桂へ飛車が先へ立つて行ので往く事もならず飛車で逆ぎつてゆけ

金へナニ是アこちとら人ハ捕る気遣ハ無え 香へサ飛車へ銀のこうか
ゆうゆうと云ふより余り気が悪いハ 喜へ何そうして箱根で展
となりやア果しが付ます 桂へ其く飛車が歩行つけと女へ見
栄もなく入る口松を投げ出し己自ら出るとき野女七ツ時の夜
湯の息子女房は白湯投げ入婆の老父を連て後から付て行
味を売行かする軒の下夫へ候まで下太郎殿助屋長
松葉同意大勢の人夫と知らずまで其ノ人夫へ来ンと見て探
て居ていまだ年頃の数とせた箱根二子山の居

お初は浦里時次の事と云ふ事を
それと悟り分別の臍と守り定め
恥とその好き顔と臍のまわりを
縛の細で我と我が手を縛ふ死て飛ばらぬ
うさぎり「ヲホンおのれ。おのれ。父ぢの
ばゝ「コレ〳〵お静ゞ「コレ〳〵と小声で
入てとび〳〵一編の対面不思議の金此方へ借て下さい頼と
こゝろ振まわして懐中より手を突出せば先ず
とおぢう小卿天一一と云ふ内の舞曲
ぐるぐると表へ〳〵流方のそう
毒蛇助、面を包う手拭〳〵
持つう舞を天地へ突さて大兵ゞ
作り声色て「コレサ祝方うも〳〵
ふかう〳〵と酒呑ところもや
祝方まん〳〵と押てゞ
〳〵糸薄のゝ

智恵白太が下々へハ手宜どんなことに迎のものにハ構ひなく大兵もの
ぎつと打てあそ不審者へ声をして咲ゝろむ此時虚長根葉目玉
ハおふ轟きに飛ハ皆が後ろ万人まで立て寒を割る声
へかけて付菓へ一散に飛逃あとに死をまでも揉の迷ひを許も者へ命下ら
欲しくも殺のもとで脱ぎ虚長へ尤も女ハ格別の慌ともそで免しも是
まで男へ全すくく脱がすれバ持てる棒を振ちらし地平を職
と打つてもバおまに王ゆる下々も好も助もきて棒振まで
去人へあゝくぜんとサア脱げと見も地平を叩きまへ見ハ飛八

ききもの中手せ七八ひきかりくとのか成事に怖りくと飛あがり
脱ぎますくあ嫉へは根みてどうふなりとも止つてにおるが力
身でチヨツつまつ者へ母衣下ゝ飛云自己のハ何とうも気にと見
者ナ裸ニ殺て追ひ剥さるゝに至上ても宜けれどおおもおそ
るる通り身の衣をも持逃きうせんとして偽てきてのぞかう
下々へ魔せ者のきもので逃すしても笑ふえてへのある与き
ものハとろもへすうハりくうさ二ツの命を其ふで致へ何せ自己ぢ
小つき入こ入ふれちまわこふむ急をてれま成の小袖さ之嚴寒の揃

千雀の大事悟おもしまのの
日起サア起子のそのべん慶て
もの二秋の雀妻こん雛子め
とうかんごの毛よと衣服日
燕鳥輝まで日鶴のこうて
深よ半あすでせうこめせび
法華経虚呂松も御合かう
二千綱ホ大綱をめでうす
こめ綱ホ朝ホうこそ使傳

さすが下太郎次助兼日頃ハ強ぐ手足を手にて押へ諸的
ハゆのを見て身を悩まし驚破兆ハ雅ミも肝魂飛も分
ず振手ハ何をゆえも耳へハ見入ず手足がぐる〳〵と震ふ
斯くハ子をとて手を処へ出き夜腹も除く腕ハ子を海で才不浮浪し
是実の老父ハ元より其ぬ強き大力で体おぐ起ろ
仲人を勢ひも取捧て手さハ愛しきを文ハ人良ハ入
今ハ只ら称と考へて幼雅も手を取ひ手本の様で見ひ
出し其の顔をも嘆拂ひ〈ウホ〉あら目出たいな〈ウホ〉目出たい

アラ目出度今宵の選到ハ五十三次宿との花よりも是最一ツ盛法
まいよ旅の行ひがへハ五十次めまするハ二つの前に勝えて嘆なれ
夕の花、旅毒づかうる子門やがて抜くる門傍の行も双ぶる
水帝門ハ早雅も谷ハ後もろくと刀の柄へ手を掛て足ハ文
字に窮屈貧を振ろ振まじ家系ハ抜てきるる後と背
こむ是実の老父ハつと走りより抱きとも手を伸て大
愚が胎と実とままハ大愚ハ柏り体天し〈ヒヤウ〉何する優
修ところと大つ鬼が股へ手を突とて隠嚢握つてあんと

まる手併物の様相で「ア下手さん、こりや何をするア、これへ
古稲村の依太十の逆剃の大将とぞいふぞ大「これの老父ア、
下手さん手陰嚢を「何の是陰嚢も下手で五も「入組モト
何飛びの溜板の股へ手をとり陰嚢とる遣へて行の
りと下也陰茎を緩急極で凡一極り様与挽ぐすて
掠とられ大見大執と息の霊「ア いて〳〵 又人殺しイーア
人殺しでぞ「サア大将を生どつて縛さア早く持て来い大「ア
いて〳〵下手さん早く助けて呉さんそこを人情へア

いて〳〵〳〵 ア、いてへと苦しむ様子は是奇異の賛のあとの面色め
が何升兀と天窓へ喰つけば是らの老父は歯を喰しめ夫は蘇小
旅で顔とある湘とおもく魂しあずらへいてへもくアヽこまと
自己らが天窓を命ぜで月代まで逆剃とうる存ぜぬ
アヽいて〳〵〳〵 コレ 暇乞と二人のものは紀者小なり極とある大
上戸小下戸の如と江戸助は世話へ私を呼ばれ又「蔵下へ
立入りて下手「老公コレまアちよと手くを放して「自己とすへ酒
湯の逆剃でも云と止めんとする出合がら老父と大喧嘩

金ちゃん浪浪と後悔して下さいまし
「御金は敵方へお渡されなァかった
こうして仲間さえ出ぬどうぞ
て済まん天罰がゴッキリと書る赤恥八仲天一へ
ア口とくく、下をへくくく
とうくく放しました
逃利の為ご百八下ちゆと治助が仕通一ぱりとうと
竹共お祝爺を止ごご老父いうくくれ

まのさま越を新右ゑもんどの運のよきうつくしき女房をもつこと是ぞ腰
のつがひ縁なるべしの人ぞ縁なきものは女ぼう
早くこゝろへ捨て仕舞ふべし
女ぼうをおやぢどのゝ手へ渡してから
おのれもこゝを立のき飛ぬやうにと顔をまもりて
歩行ながらそこ〳〵歩行ながら手水鉢の前で手を洗ひ
手ぬぐひで手をふき甘酒ちんだよ茶もそこ〳〵へ
歩行ながら幸りやア浜さんの花ぬす人浜さうざ

飛〳〵忙いで白酒ちやんと抱子もて仕ら
西つまでこそ新小路が神社のうら
是不在者〳〵イヨウ大安売生田町矢の腰
なのを教眼でさゝて其のうちの
ものを取てげろ〳〵此ぬす人彼紀伊国屋
めをヲホン抱りとられてげろ〳〵抱らるものとみえて
せん〳〵工廻ろ〳〵浜まで抱られ
まさ蔵〳〵馬鹿なことをいつてゐの子大でげす浜まで

引抜くとまるのゝ大へイヤサ大人あるのまへどれ按じて腹へ手を
入れ探りてみて大へ鼈甲様のうちに空腹の売薬を
分くずすると下女へ其がいふと言つらう膝がしら一寸其のけん
亀へむけさまの方へ向つて探らし下へ手膝がりで腹の手癖を見
ぞろう龍へ何ぶんでも一寸あて手をみせへ亀ちやア大変だ大変だ
ゆるく境に浦り寄せられ宮の蓋を門探りが悪癖ゆへ
覗きことゝ男へ何れどれ尽き鼈甲様のうちへ明ら所に於て
居るやくずが腹の方から大きな大キな尻が尾が亀り顔を

出して居るが方一寸さでいれ性へやせんぞとも大にあく様は
分く痛みと手をやり腹ぐるをも探りちよして若笑ひ大へイヤ是は
お袴の方は探り出しやまがまかり掛替のそうが残りて色や
とうよ是れて一同笑ひと旅ぎ帰らんと折からが明六ツの鐘
ボヲン鶏の声　トッケコウコウコウ
東都まにさて是までは第三編の趣向の居のとこ
ろ是から先が四編の幕明其のためにとぞ
さやう

頼むといふ 葉「エヽ塗紙は真正の郭しらずと名ばかりなることを
あやアヽラアヽ葉ゆへ慢気なる甘いが自己の執向は甘いにしらずへ
是よりも初元の質ある逆へ入つて塗紙の方が 葉「モウ塗紙
の郭しらず者の故か奴も料もを迷きせよと 下太夫が逆剃の
、お茶番やらに連中の人数を多くあつて囲うなるのあと
以みなそれの娘子を死者程と論じれば「シ」下太夫が相の人
ご手あかう番頭よりも知つてきす 葉「素湯の婦人は逆剃
さらずとも初めて此れの上手にして仕舞ふまい 葉「

あの人体には文字大人はあらく妙なりとぞ 葉「都治の
行かざるものゝゆゑに法花と人をおもひてやがては流れし 逆位
かりしてよく天狗小路で何ぞとおもひし毒舌ぞ一の自慢をも
なアゲるかどうり 座「花撫ひとの 葉「生剃る事をして法剃錦楽
亭評へ出る出すうし畜見ては世一番役の「ちがうと云ふア
ざらしまいた奈か出かけてきなせ 下太夫「初て一執向計較で
逆剃の教をよつてなさらうがやつぱり 葉「手前かが気で定
九郎の手で数ても中の相へのんで 逆「遠くへ 葉「此様さ

○

しナ。エ下太ろものの秋雨の程
さのぐる夫思ぐ発てく膳ま
のをと押ぜも発うてく其処でその
百姓と振そのの〳〵膳仕の汁へ行灰をずうッと百姓入
まて垂て人〳〵汁味の悪
一服づゝちうく〳〵消て仕舞ふてこのご薬ばかり
ろい熱風さも已膳仕の汁へ行灰と百姓入をそこの人の
八金程の価段のぐらう 段 灰仕の汁へ行灰と

うまて〳〵ゆ一膳をチヨつ呼下手ゑつまう〳〵也所でも稼ぎ
とも平ぐろう 段 いつう〳〵も稼ぐまげとも也 虚や まッサ 然
るう〳〵さ〳〵て垂て処で汁味の悪の魚の骨〳〵のア
湯屋の流しで素青薬を踏つけとう雨ふ折まて
消ろう夫の糞のかとも既で歩行とうの稼ぐる
をも平ア宜のう 段 旅稼ぐるせ也 のんがでござこれ 然ナヨ 虚
魔うう 段 只今〳〵汁味の魚の汁膳とそのハナ厭悪
忍辱い剛一とまるてござワ虚や一汁味の魚のものそのハは

のいのそとそのうらもそうあ
でそのあいだ家の雨戸を
ねる　虚空蔵菩薩さんの祭りけョ
いつも大ぜいの参詣そのやかましさと
いのち御幸の大太鼓の音ごうごうと
めてねむかるとちやアでいかぬそれ
ちやアいやアいやアいのるざもやアが乳かそれ

素的ちやアでもあるまいそれのみ
まで笑ふ　まことに笑ふ
うべ自慢もさもあらう　森の石松
命とそれ切りと一脇に消ざうも何と
そこ処　執念深い　執念深い牛乃
先様つまんでこうこう大きな例の傷痕
性悪で　素的　喜次さんや乳母
日吉ゆへ　これ　まこと今夜ハ自

るゝ〳〵喜虎〳〵すさ〳〵おおくまのゝ
ようん熊公が百脚ともの八百怪族のも
のゝ定りぐら百脚不てのり
其ぶ不化物ゞ捜れ出ゞと日本ア大騒動ぐら〳〵燈台百
脚との人形と森め〳〵先ア八折焼と百脚ぐらゐ改チョッ黙
てのろいと白眼つみ〳〵ア手処ぐ百脚ともの人形焼をその
ざ跡の人数ぐみ不減ぐるのゞ虚ろ〳〵それぢやア人ひとゞ死
つまりア形焼をア出さゝとのゝぐらう改エイ形焼でい
れ〳〵形焼の池四の中へ入まる焼台を人数ぐみ不するとゝの
のゞゝ虚ろ〳〵同ぢう雑ごぜ不喰ーて生ちやア駄て死やっが
らァ生ー形焼ともの今ゝーて我ら迄ゝ改ヤ何故形焼ゞ
ら泥ら迄虚ろ〳〵お松出で来るゝ今ゝ〳〵現ひ手ぐら形焼の
焼ゝく形の松の焼ぐ森〳〵お七ゞめるヨ丁未〳〵りく雑ご不改ッ
こぐ森〳〵そ処ぐ改〳〵焼台と人数ぐみてゝ生てその焼台の
数ぐみの圏を指へその圏へ三を書て二をゝりの八一番不化
物ぐ森〳〵と一脚の指りを一二ゝりの八二番不化
物ぐるのをゝて斉指りを一脚消すとゝ形不消ゝのゝ仕

舞の番不審こゝろめで残らず済し一番勝不審ながらこの人の申
楽大ぶくう表勝不して後不自由ともちゞ勿怠慢と云飛
ある妖魔不服を発し大悪生と争りめ空うとの人舞
番こゝ物数ぶくく下大へまつ〳〵ア座分面こゝと一番付ぐ〳〵
あつまる先生と仕舞へまつ〳〵ア旅とり不審ながらもやア所
笑く面白一番ぐ〳〵旅れまるぐ〳〵ア処不まア五
人舞こゝとあつサ虚ぐ舞こゝとあつまるこゝろそ人ごゝろの舞ぬ〳〵
うるせつ〳〵。ア処で五人の中へ大悪と雑ること云人不自

ろ〳〵六番面を指へ六番ぐ〳〵六番ぐ〳〵ア記とまて面まこと
別ぶ一ぐん二番こもこ面をよら〳〵更を強して強こぶ持て
舞て舞番面をこう〳〵老まぐ〳〵強して持て舞る面と指ぶ自
己ハ一番ご自己ハ二番ごこと云て出すこと大悪ろうハ元舞
ぐ〳〵六番面を指へ六番ぐ〳〵六番で打面ぶるこの人手妻いる面理くのだ
らうぐまぶ芸時の舞悪しやヲホン舞を指へるぐ五番まろ
些一ぐぶ来さのし強へ〳〵ア旅程ぶ大悪
と打面〳〵囲せべいぐろまる旅ぶ所へ化舞ぶるのて

出でこんと仕方の次第ゲヲえるのくっちゃア痛るめへがそこで出ようけちゃあ名うのあるそこらう業めへまの暗る所へそこで出ようけちゃあ名うめへけまど。ハイ仕方の隅へまろうと出まくく番丁血やまの処で次まろう出まくく鼠で出ようけちゃあ名うて手と出して天窓を探つてさらうろうの業へ下太へエイ恐て居ろイ業へが親不孝で下太へエイまづ一と名のるくの下太へエイまづアく痛くさ卅両人の面を突くまくく殺くよ虚へ千処で仆太ゼ仆報いの工夫が色のご下太へまづ

おくに有ごとりの変化の門うらう一番安ッぷさうゞ化さのの狐墓へ百貝ゲの猫ぐをがくさうろうくと空の雲の中へ投ぐりさうの一極の下うろうゞ小理まの業へ仆さまも報すまで支日のご候あくゞ小変物の業へ分ゲ〳〵ネット亜馬の水天宮とうの業へ分て天狗小僧うとのの業へ仆報ごとうろう天狗とりのい鼻の高いて小極うて居ろとうその業の

（飛切世界一額との紙札をまとって天狗の姿
のごとく扨てこそ人の付と気向とつよ
と恐ろしき怪物と肝をつぶしながらア唐
もやア物ののろい怨んでも甚だ
とうふ色の面小判とくいと化物とのが五
一面小判ともこけまじ業平の朝臣と
うも光氏の君とのよく似を業
（改メテイヨ不業平人の面をのぞくイ業ヲトヌラシ

うめ（祝面と驚ひつくりそ。エヘンと先祝小僧
てこも物忘眼のう迷惑と日あ
方とのよのい空色の手拭で天窓の髪をつつみ
まの仮さん小袖で主をの仮さ
髪と守り襷巫女仮主小袖
の袴とうし鼻と額の皺
うめ（祝面と驚ひつくりそ。エヘンと先祝小僧
てこも物忘眼のう迷惑と日あ
方とのよのい空色の手拭で天窓の髪をつつみ
まの仮さん小袖で主をの仮さ
髪と守り襷巫女仮主小袖
の袴とうし鼻と額の皺

ある所へ穴をあけて其処から眼のみえるやうにして張付さ
蛇の目のからかさを眼と見せて一ッ目小僧と化て変化
肩あげや腰あげのある着ものゝ袖で胴るにいきと出た
の達磨ら〳〵守袋をぶらりと下ゲ片手には燭臺をさ
て手には盆の上へ茶碗をのせてちよろ〳〵ちよろと持出し
〈モシ〉お客さんお茶をあがアれと云ながら舌をぺろりと
出して見せれば大臣はキヤアつと云ながらひつくりかへるに違ひ
あるめへ〈政〉其味ことこのアぬちき 一趣向をあるめへが

ちよろ〳〵ちよろの時は爪先で歩行ねへといけねへぜ扨て
変化は爪立て歩行がいゝと梅寿の作五郎が教へてく
れた〈コ〉化物屋敷のてまへかお座敷へ来たら此所の前へ
る〈頃〉箱の肩とヤツカラカンの猫と化し丸くなつて穴の所へ
煙草を揃ゑ黒やに天窓の天鼓羅するめの揚
そこ〳〵ヲツト其時ござすからそこで青蕃椒の揚ものを
哈ひこんで辛さに壁へ出しても出ねへ〈政〉ハアこいつア
あがり青蕃椒を哈つて涎をくつてのところの当面はお

十二銅ぐらゐのお勘定で五升でも汗そこそこ
先ず其頃までは張子のお達磨さん
渦のやうなところへ家の中乳病み
つこらうゐて玄子坊主うぶ
こそうゞ人好のまる愛化が出来
向の井戸へ投込の本来お
りスゝへやそらア虚へ
と就向ゞ付て居るから大人気
虚へ
其い近頃お早いお手際ざ
先化ってゐる向い顔を張ってん
就向と縛めて縛まとの
成のやうこけ底のある所を刷て元眉毛この両脇
と頭のまわりへ繋つて此舞初
元手の実りを南瓜て額の両方へ
筒袍うゐまを鬼のやうこ
ごとうう 下太 鬼不動のやうこ

そりゃア彼平行安そのの
全体老の主番で数拾両
須へ逃こんざのを私番門
追蒐て性そうけ
出て来の雪て採そうてかち
下足へ文そうれとヨ
つて萩畑で牡猪が暴ばけ
ちの不祝さるの春中へ

付年房の初もと眼慣さ
見入ると変ぞうな髪さんの
着もんでのつくくと引きれ
頸揃ふと又えもう虚へ年房の初におやア見つて
尻の流が頸不思ぎとそうでござりう下太へたれさがらこのに
自分の先の折ふえるうくそ処で下太公思ひ
まりやアおあの化ろう下を へ自色の化れ
い天竺へ菓子袋とかぐり再の所を失らせて慢頸の脇

そうぢの三つ穴をあけ糸指ら目の上へ沈
つみそで腰ぎを目とる年
縞と紙布をもちまた未完の化のオ加にりてぎござ
ござ茶めへありやア結ござ生のぬく 虞へ口の実りと人の
行茶の処へで投すこうそ
長さんおあの親面と吸ふ
化あられて仕舞て外の余子
外通の面と通り手ねごで頼ッかぐりて来合

羽をそろそろ手拭の等拵灯とも下僕の化りの手拭て
○へイ有がとうよひでござりまするそうかそれ
幕めへ〳〵ござりまするへ下女の座人
めが乳呑をつれてくる〳〵亡なめの燈台の明りを消すとは辺
そ忽捉まんの暗れイ由両
腰こしの凄まで吟味一張の風呂敷にて掩
るのめひさかとまく探と明るくまそこを掛ふ蒸籠
その一ツ月子をそうが面目ぞけの端緒とぞりてちまく

持ぐー〳〵お菜とよれと蒸こん今大悪いコレッテ蒸
いそ麻のうおあ取ざと探くまそこ化物のうまで
大公の本兎が掛布の下ホ潜
所の処ちや而らねと逃
あけの向ぞなくこそぞ
さんそうこ〳〵探返せば狐方の脳うう虚兵そのうま兎
そうこそうこんホ蒸さんの蒸合羽が〳〵お

げぐう外通の面で待うけそこを勝と接をホれ遠
ゐどこ次へ参りなくと参こゆうく早くこ次ホ緑が
らう虚ヒへ自己ア蛍のの七ーて重ぐの接へ手柱ゆとへ八百
や盤へ分ぐ張ぐらう茅め虚ヒへトウト
ゆち下太へ自己も一所ホ仕ぐこ次ぐう
つのりぐ接へ壁ア仕込ちて重ぐ変で頂ととするゐ虚ろへ
そんなう下太ヒ仕て重ゆうとこ二人ヒ妻出そ訪ゐホ
きーらう茅原中茅月長汐助い中船ヒゆちう八虚ヒ

小揮をそぐ酒の始ゐヒ付ゐ百怪続もりぐ
長湯ううき重般ううき重ぐぬアホ
ロ在ヒーゆうぐちゆアホ重う茅へ一の
先うくち私そて居ンぐ接へお物ぐ出茅ヒ一め
子供うくちの座ゆゆうトヒ気うう
ヒて居ぐおうくう表へのうそり
うくう程を親ひ及ホ子ゆて嬢ち
ネア仁町の程あでけすトゆて

下女御ゥ大変の美人ゆえ石町の長兵
衛人そのまゝぐらゆえ相ゥ薬へ参ろうと
存ぢまく性ゆえ大変いゝ声を張あげ大人の方
御免遊ばせと申ゥ内へ這入ゥ見ると一寸と
薬ゆえ一寸の頓本する所へ風と二階へ
参ろうと思ゥ所へ大イヤ〳〵百姓でく
手前、無断のそう〳〵困ってゐる所へ
御免なさい寒の入ったそうゝ人形町
大変な美人ゆえ長兵衛ゥ慢木挑来とそ
格子を飛破程ゥ〳〵押あけ這入ゥ
大へでげするゆえ石町のりんぢのご来ごと薬
うけの仲介に焼麩の付焼をすると。ヲホン是、名薬
アメリカ〳〵製ゥ男でげんすゆえ布ふちにはッかって
来て下ッし大へハテ下僕が町門ゥ鰻魚を高ふ売ある
でげんすゆえ鰻をうることせいうん蕃らうんざ升にて金魚
とひそ〳〵心緒も焼麩のやうなものを食ゥまぐる〳〵
招ることをして長やゥがらってそ

だげんすナー吐て次助を見付ル
〽グウ〳〵コウ〳〵と心地よき体にて鼾の
声も数珠のごとくにて逃てゐんとも
を飛ばうとて動ねバ体ぢうを縛りと
向ふへ引ころバ座のまんなかへ倒
飛んと開ゐ入を見る茶子ハ漸の茶子ゝ飛ちり次助
ぎゃ吃ゐり居をさるにぞつと逃ゐ次助ハ行
うろ〳〵とコロ〳〵と表へ探つて又来ることと

よ世ゐも利ゐ茶子ゐるまで〳〵
ツレと安ゐ枕辺助ゐ肝を潰し
子ゐ茶子ゐるくと咽喉そのり
スウ〳〵ホウ〳〵〽ハテ心地をぬ
ぎゃく変ゐ表次さんの声のよへ
こ様の寝姿弁が額のよへ
ま九「アヽあの吃驚ハ
と息絶間よへ吸ぎゃく涙をあ

七偏人四編の中

でハあんまり咽ぢやア今日ハめつきり雨が降せんもしと七十五日め
御出家のおすナア工工何でも残暑ハ秋の隙のあすが勿論のこと
あそべハ 吞氣「コウ〳〵きみ食を探しで毎日結で知らぬ顔ぞ
げるのく 茶目「お稲さく七しと大兄先生の前の通の藤衍
此方へお出の社中ハお納米をおこのぐ其それ朝食で
こまるみでこんなお粗いあちぐさげまで探入で居なるより
とうぞア 吞氣「何かまで減徳ハ探入で居なさる 波「自己も
名アワるう堅田もわらぬサ 大「果報の探でありへよるへ

玄愚山人なぞも阿房が舞をちやア近ごろおき気のドエヘ壁ちう
気の毒でげモナアとゝ 拆る虚呂松下老弁ハ哭の顔
帰りまで拵あと尾羅狸ひきあけて今やくらぬ大変
あげ 虚呂「其く化のあと哭こんで来たものゝ名所の弁へん
なのが出て来ても大丈夫ご 下手「喜次えんや下たの面ハ猿子けれ
子あるこぜ弄して青鬼の類かやア あゆ奇妙と朝礼が社さ
何でも一つ目ぢや猶の泥の 吞氣「エヘ工へ 茶目「何ぐく徴ご何処の
奴ご糸を右所の大愚先生との支人が消来後ござ 波「

弁「そこ処の二人の女アッちへ移んで今月が浮てさうろ
ぎろろっ。ソレ丈拙男つて静かでいゝわ
ち「ヲヽ其二人を入れ物て和尚様へ二月間金
や茶飯と寝つこと願度事だらうぞ
弁「ヲヽ石町の大店の息子が此来様だ。へし物生が出て
来らァあの花男六和尚様れ来ることの仏滑てト云ふが落
みをあけて入らんと為ふ不大男が及ず泊つて茶っ。ちや。今月ぶこみ町の
ぎろろり 移話り

ち「さうさう其様ぶ息子様が物の疲るのアノ寺是非 仲間の
若町の息様方のお子様もサあんな鰐
へわたしもぜひ自己が脱引を張へさう
わたしも言て運八白七塞りを張ろ ござろさと同へ妻
物人うまもつて化わ物へまつて垂張人と大男が来
てうろぶろあわ物人ワサ「遠人移人息様ぶ息様
ぶが来てろわ倉物人。子へモレ石町の大店様方のお子様
アノ若町の息様方のお子様と出ぞんぐ出ぞんぐ

昔明とう人のい所名きくそ不安未門みそ「揃町の竹屋の
よへ又　下太　下太
旧云和角もう和已サ子　下太　ミ子子向よでの秋ぞん「て居やすセ虚並
うもう　ふのき　ふく　ふふ　虚セ
居松のひ消ホ大鬼が声セ吹くてうう之　虚セ　下太　ミアア号袋よ
ぶ来そからちやアおとき和掛へがるおおめ。アおきおそのよ
あアヨ袋とふヨそく後のぶ「て汚ヨそうう濁りセ対て
おさのとふのぶうヨ二角け号ふ後和サ支が汚ヨそうう之
和よきを処ぐその汚ヨそ後和を絡のて笑ふうう之きお掛セ
云のぶことかやそうみを殺らさんとき処おみそる婦陶装を

揉るよう早く掛つそそて「コウく来ど角已とう七笑あホ
ぬてそりう的居ホちやアぶそ氏的下本希の笑あうおセ
包そる風呂炭セ抽ホ混しセ寵と腸セ仕舞来り　下太
サアく一亜考うそう　長「この過ハ快絡くく多アお物セ考さ
セ
殊りぶそう　改「長さん日自已日ッ七ヨ号袋ホ先生の号袋
やのホ云海さんとタア映ぶっ　ふべのん　ど　へ又
うう　下太「十二号銭亜のホ云海　茶月「ンく今おが九松りそ豆のぶ
銭ホ先生サっ七ヨアノ苦閑ッ　下太「苦町の号袋ホハそ考

け且と　茶目　さびど
是等のうちで春の夕ファうと会ふ藤元で住
まろ　さびご　ぶう　ろう
舞ふこの日宝会向ぜんの理屈ぐろう択りさう
ろ　ちゃあ
なんう頼りふ対性な関分とまる夜のやうとねど下さぎ
う　すと　うつだ　さく　とびご　ちゃあ
解せる振まる歩ー嬉下ふうだ名ねうまでタファうう
げ　ねこれ　ーまう　さく　ちん
次側日未藤元で住義とのうまれのうさうと生新角も
ざ　さう　ーえぎう　と
ようを実のお事とうとお私り人で宜うつと栄倉理で日毎
さや　ちこう　ちこ　れ
まで来うとうめヨ表目ちぐ藤元で今日
ぐろ　ちん　め
あうとのふ先利おおまるちぐ実ねお当のと分の私で春

て春うのう下太朱　までの日廿五で藤元ふ家ぐで日　茶目
いえ　ちぐ　れと　もうくいうく。ち
言ご春ちも秋の風ざ分のでうまで日口教ぐ多いと縁ぐ当
さうく酒と酒おまろぐいうう春人さん今名ちおぐ湯小住
久　ろう　ちろざ　さ　ちん　ーまさる
てその帰りお円風うう珠て来ち云字ぐ一外サ史うう
先前政ごうこ来ぐれ泥方うう一外サ　下太　アアろ云へ
春ちぐ秋の風っあぐのくう茶目ふまぐのへいち私と我
いうう　茶目　アう　的と酒ごを
くく　虚号　ふく　ーせと　的と春落ーのう新ふっちサ　下太　ふく　ーろう　的と春

の世うの紙〳〵洋いうん狐んざ
狐人が酒の中あやまとい兎ざ
盃が横のそう人語給がり
酒の御ありへざり付て居給人ぐ一件の支度ホ知カ
ものが官せ　虚吾　ヲヲいう一件のお版の朋凡や弁角のヲア爽
食の乃臭ぐそれなアト皃よりう酒のまくホ一人ぐ板てホ一
つ同ホ狐未発ぐ多ヲ支ぐれ
くそへ各をくぐ次ホる下ホ

よろこぶこの酔さ感激でかう二下駄
の都のもやう附ら奉く酔りぶり大「下僕も大狼町乳酔ふお
よんで居まし入りぬのうちもぢた美かみあうこの八合梅
ばけど作田いくこのおお酒の香りぶ二条九重をお旨ひめるうあつ妙
ぢのげんせん業間「その旨ひかるると言やア多ア飲う家だ
面経ぬとうの七重ッ村ごとこと花ぶ申くおりうのことョ
下ちそりやア妙ぶ知仁も今うくちらうぐやア粉人う改「笹う
らうく大繁ぶ毛「虚「なのせんまえ霜

東ハ冥ござる　乗円「十二本　敗「ナニ十二本のうちのあはれさ　乗円「ウム
表裏よふア十二本もちやア手妻でもあるまいござ　大「イヤ風の
つまりハ無尽でげすナ　喜「ソレく云ふの縁がぞうヨと鳴らア今が
大魔鬼がしきさといふので　敗「其く闇とうらへ入ませでだんく
下女「其ぢやア羽織の皿へとまつたとこ入れ物へ入上肘のを付て出る
一番をひいた者が一ぞんに喰ましてのうち一番け二番三
ぞんと順くにかの物のござる　虚兵「エてあつこ云ふ先刻あたまでど
喰トいふを喜ぶ弟側から袖をひく故虚兵松ぞまた衍

喰の鼻皿がなくては出来ねへ　大「兎角浄留げでのおせるでげすうナ
敗「其く引つて闇をひいて　喜「大恩先生が存ぢやう　大「数らぐ
お先へ引でげすとかすと義理の闇の鼠が徳瀬へかゝつと極で
げすナト是より云人が闇をひき縁て孫で喜ても当然例極
やう彼相談弥ら粉散衍て才女番を大恩がさるけ彼様の人
と闇を知ぐて　喜「イヨウ是ハ難都才一ぞんの渡さうざ　乗円「
自己の只二ぞんぞ　下女「才云ぞんの守袋で兎角安かんが言か宗
のざ　政「此方ハ二ぞん　虚兵「自己ハ無人也と衍闇の書そんが極れば大

愚かや〳〵蓼喰ふ虫も大
好き好きと云ふ通り人の
ずるく怪現象の不審を
その時の例の怪談を
押しくめ 虚喜 鼠ごいよく
下女 テンコく テンコく 番頭 ござ
あの娘と怪異の美中へ村内
六蔵の主娘〳〵と云ふ噂者が
ぜん二ぜんのかたと云ふ

[illegal] 僕が主人 番頭 主人 開 大
[illegal] 面って云ふ世実
[illegal] 丁寧 実
[illegal] 恐ろしくと思ってゐる
[illegal] 怪談が面白くなりそう
[illegal] 厠ごの騒ぎ
[illegal] 一寸 [illegal] 人数ずゝ
[illegal] 食事つこうと二
[illegal] 傍の障子の側

[illegal] 悪事をするとて長慢
[illegal] 頭ごやげ 一人 [illegal] 人の両人
[illegal] やうく [illegal] 主の [illegal] 乳
[illegal] 主と [illegal] 僕大愚人の
[illegal] を金ぞ私しの [illegal] 一ぜんと
[illegal] うとう [illegal] 丁寧 [illegal] 大きな服の
[illegal] お [illegal] 上ります [illegal] 私
[illegal] 上ります。

一つちぐこうの衣まつ〳〵ぶ如七舩こ兵
うこ如ど「ど」て哨そうこ哨りを頭う注」そ幾天ぐの七つて拵ど
てゆ兵のまつ〳〵ト云すぢのうちの蛇心を一ト箱ひこそ掌へまぶ
まび栗岡吉二ちんか乖ざう出一乗目「只今ひて中まのお
ちる嘯〳〵そ取りそ〳〵石決こて実か魂とをそうく石決こて実か魂と
イ二サ江湖上ま八形柳このまる八そ私ご岡のむそうこまり
ニこ及茶筅こ志留毛垂まり〳〵ぶ一枚よりぶ一ちやうんとそうぐ和ちそう踵
焼人んでまるも和ちのの栗飛淋ふのトちやんの

秋の赤ゝこまる山指小雨の強夜ぐは産のまるすの湯を
薬〳〵んへ一のぐ〳〵せ七こ表
うんのまるとこ元ながら云ふう彼方よ
薬硫こ薬硫こ薬硫こと元とこ元
い湯ウぐアリ薬硫こ甘い湯ウぐアリ甘
て栗まる公は産のまるすゝう山夜更ふ和のぐまうと思
て除つこ富ふ七まるこ晴
まるせんの指甘い湯ウぐアリと余綿をまう」
産のまるこ三岡まるふそな砂糖の湯ぐ

一病ひこそうとまもるとへめんてんイヤほつつ猶
天おうくめんてんヤ上狩そくそこのくやくまごでくやかうご
きと処ふまる向いあのうこそ赤のうつとりやア骨ご櫛げの
ぬてこそせうやく此処ふまるかうまるてアア是りや柳ごの
こち此方らの緑の男が骨がまりさまる柳がのり澤素言
らも此緑素こうこへのうつとをそせ。八潟と天ごおうくめんてんイヤ
潟くめん天まうくめんてんヤどのつこの上納どうこの上納くまりうくそ
とかにつうくそもも此今そうう大丈夫ヤレくまる体の思ふまこ

吟と一息ついてまるこ細うの石ごをぎゅうと伸して吸ひ止め
ふかやうにぐうりくまるこ春まる水ごりまる此処ふまる北のご石ごの
日ごまふ被此のまる届けまうと殺しまるこ幸うの煙りを
ふうつと吹くみらまるこまるすと網戸の内ご忽地一すぢ消
まりこととこまるご残り煙ご檀ご一すぢうて次へ続まご虚ご松
そまるふ入れくうり三へ絵うそこの石柳うの此ごあるを
中し上まるす天空ごうこ式和ごまるこ下りをうごうまこ無
うう続かごまりまこととこまるこ一すぢ減すうのごあり